
絶望少女

En

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶望少女

【Nコード】

N8211Z

【作者名】

En

【あらすじ】

許可と

登山と

絶望の顔

(前書き)

何か最後違う話みたいになった。
少し残酷かも

「うん。じゃあしばらくお兄ちゃんの家泊めてもらおうから」

小夜子は今日知り合った人たちと一緒にXの家に行った。

そこから、両親に連絡をしている。

小夜子は冬休みの間泊まることになった。

別に、公平といたいわけじゃない。

Xに脅されたのだ。

泊まる場所も、本当は公平の家じゃない。

Xの家だ。

「小夜子ちゃんは、僕と友だちになりたいんだよねー。なら、僕の家泊まりなよ」

「せめて、この人の家にして下さい…」

この人とは公平のことだ。

小夜子は、公平がXのドレイになるのを受け入れた時から、彼を、

『お兄ちゃん』とか、『兄貴』とかだけでなく、『公平』と名前で

呼ぶことも嫌がった。

「Xのせいだ…」

「何か言った？ドレイ君」

「いえ…」

「けど、取りあえず今日の所はみんな僕の家泊まってね」

「え…」

「何で…？」

神田と木之本と露骨に嫌がった。

「嫌なの？」

「だって、昨日ずっと…うわー！」

二人ともXの手に捕まった。

「嫌なの？そんなわけ無いよね？」

Xは少しずつ力を入れていく。

ミシミシと体の軋む音がする。

「嫌じゃないです！」

「嬉しいです！」

もう、こう言うしかなかった。

「だよ。他に文句ある人はいる？」

小夜子は強すぎる力の前には個人や集団の意見は無意味なのだと身を以て知った。

他は全員、いや、桑野以外は既に知っている。

「質問がある人は手を挙げて」

「はい」

「はい、ドレイ君」

「何故、ここに泊まらないとならないのですか」

「それは文句ですね」

「違う！違う！純粋な疑問だ」

「発言の許可は出してません。質問には答えますが、罰を受けて貰います」

「」

公平は握られた。

「今回、皆さんは、僕の味方をすると言いましたね」「ニギニギ

「」

「返事」「ニギニギ

「はい……」

「なのに、途中から応援を止め、僕を裏切り、暗殺者の応援をしましたね」「ニギニギ

「はい」

「その罰です。他に質問はありますか」「ニギニギ

「は、はい」

再び、公平が手を挙げる。

まだXに握られたままだ。

「はい。ドレイ君」「ニギニギ

Xは少し力を強くする。

「こ、れ、は、い、つ、ゲホーい、つ、」

「タイムアウトです」「ニギニギ

「そ、ん、な、な、」

漸く公平は気絶した。

Xは公平を放してやった。

「他に質問はありますか？」

誰も手を挙げない。

下手な事を言えば公平の二の舞だ。

「では、質問は打ち切ります。今から、明日の夜明けまで皆さんの人権は保証しません。故意に殺したりしないのでご安心を、もうしやべっていいですよ」

Xの遊びが終わった。

小夜子が絶望のあまり泣きだした。

「要するに、事故でついうっかり…とかはあるって事だよね。人権保証しないとかが言ってるし、私たち死ぬの？」

「安心しろ。俺がみんなを守る」

桑野が親指を立てた。

橋は、こういう時の彼のぶっ壊れた勘違いっぷりを、正直頼もしく思い始めていた。

「そう。じゃあまずはクワガタ君からね」

言いながら、桑野を別室に連れて行く

ただ、惜しむらくは…

『じゃあ始めようか』

『望む所だ！来いギヤアア…』

別室から桑野の叫びがした。

ただ、惜しむらくは相手があまりに悪すぎる、というところか。

「生きてる？」

公平が、自分たちのいる机に向かった投げられたら桑野を見て言った。

桑野はとつさに変身したらしいが、全く耐えられてない。

辛うじて生きてる、と言った所だ。

「改造人間って良いよね。すぐに怪我が治るし、他の人より強くしても死なないし」

桑野は、Xと知り合って一日と少しだ。

なのに、今のメンバーで一番扱いが悪いのは、Xが今言った特性によるのだろうか

「昨日から思ってたんですけど、こいつって殴られる度に記憶が飛んでますよね」

橘が言った。

彼は昨日、桑野が目を覚ましてから、また攻撃されるかと思ったのだが、何とも言っておないので不思議だったのだ。

「まあ君たちより強く苛めてるし、脳改造も失敗してるしね。という訳で次は橘くんね」

「え！？」

橘の体は、既にXに掴まれている。

「はい。別室にご案内」

Xは立ち上がった。

橘の顔などもう見えない。

「助けてくれ…ウ、ウワアアア」

橘は別室に連れて行かれた。

彼もいつまで保つだろうか。

理想は朝までだが、桑野より手加減するにしてもいいとこ三十分だろう。

机の上でまともに動ける者は、もう神田と木之本と小夜子の三人だけだ

「もう、やだ…帰りたい」

「小夜子、安心しろ」

ここで、公平が復活した。

「流石に早いな」

「毎日の苛めをなめるなよ」

「別に威張ることじゃないですよ」

小夜子の敬語が公平の心を刺す。

「はあ…。いや、あの程度なら少し寝た位で治さないと体が保たないからさ…。いや、そうじゃない」

「何ですか？」

「いや、あいつが酷く苛めるとか言っても、根は優しいからそんなに酷いことにはならないって言おうとしたんだけど…」

「そうですか」

「公平。そんなの俺たち知ってるぜ」

今、公平が何を言っても傷つくだけなのかもしれない。

それでも、公平は自分の考えを言ってみた。

「次は俺をやるように言ってみようと思うんだ」

「正気に戻れ！」

「とうとう変態になったか…」

「もう、話しかけないで下さい」

「そうじゃない！俺の頑丈さは分かったろ！？だから俺が時間を稼ぐって言ったんだよ」

「そう上手くいくかあ？」

「駄目」

ぼろ雑巾になつた橋を机の上に置きながら、公平の提案を却下した。
「何で!？」

「最近、公平頑丈になつてるから、力加減が分かりにくいんだもん。下手に強くして殺したくないしちよつと弱くして、全員を苛められなかつたら、やだし」

「だから言つたんだ」

神田が渋い顔をしながら言う。

「じゃあ次は木之本!」

「何で!？神田じゃないの!？」

「何で俺なんだよ」

「悪いけど、ただ適当に言つてるだけだからさ。ほら、行くよ」

木之本は机の上を逃げ回る。

だがそんな事はXには無駄だ。

「クス…机の上走つてるだけで逃げきれると思つてんの?」

Xは木之本以外の全員を左手に軽く握り、右手で机を返した。

木之本にしたら、突然足場が消えたということだ。

「うわああ!」

木之本は宙に浮かび上がり、一瞬、静止した。

その瞬間に右脚を上げて、そこに木之本を乗せた。

「はい、残念でした」

そして、木之本は右手に掴まれ、左手の公平たちを机の上に置いて、別室に向かった。

「恐ろしい…」

「逃げるだけ無駄ですね…」

「次は誰だろうな」

ところが、個々にきて、Xがなかなか戻って来ない。
二時間ほど待って不思議に思った。

「どうしたんだ？」

「さあ…？」

「あ…。出てきましたよ」

Xが出てきた。

木之本は体はボロボロなのに気絶はしていない。

「はあ…。やっぱり神田を先にしたら良かった」

「木之本！一体何が…？」

「わからない…。何故か、気絶出来なかつたんだ」

「まさか…ドッキリの時のトラウマが!？」

「かもな…」

「そろそろ、次いいかな」

次は神田だった。

小夜子は深いため息をついた。

「次は、私ですね…」

「なあ、その敬語止めてくれないか？」

「あなたがあんまり情けないからいけないんですよ」

「そうだけど…」

「分かったらもう話しかけないで下さい」

「はあ…」

神田は頑張った。

一時間も保った。

だが、帰ってきたときには消耗しきって、ピクリとも動かなかった。

「じゃあ、次は…」

「俺にしてくれ！」

「…」

小夜子は何も言わない。

「駄目。君が一番最後」

「お願いだ！」

「駄目だって。君を先にしたら、夜明けまで気絶しないかもしれないし」

「何なら、足でも、靴の裏でも舐める！だから…」

「公平…」

彼はXにどんなに苛められても、それだけは、今までしてこなかった。

それは彼のたった一つのプライドだった。

「…分かったよ。小夜子ちゃん、命拾いしたね」

小夜子は、ずっと何も言えなかった。

公平は、Xに別室に連れて行かれる。

小夜子は、兄が変わってしまったのかと不安だったのだ。

だが、それは杞憂だった。

兄は、公平は、何も変わっていないかったのだ。

「ごめんね…。お兄ちゃん」

すぐく久しぶりに、そう読んだ気がする

「だってさ」

「お前趣味悪いよ…」

Xは、公平と別室に入る直前に盗聴器を仕掛けたのだ。

そして、これを公平と聞いていた。

「良いじゃん。小夜子ちゃんと仲直り出来そうだよ」

「そうか、そうだよな。それにXからあいつを守れた訳だし」

「何言つてんの？小夜子ちゃんも平等に苛めるよ」

「無理無理。俺夜明けまで耐える自信あるし」

「そう。じゃあ取りあえず改造人間レベルでやるつか」

「俺…死んじゃうよ」

「公平なら大丈夫だって…あ…その前に」

Xは公平を床に降ろした。

目の前にはXの巨大な素足がある。

「早く舐めてキレイにしてよ」

「あ…やるの？」

公平は面倒そうに言う。

Xは何も言わずに床に足を踏みつけた。

「」

「ドレイに発言権は無いんだけど。分かったら早くやれ」

公平は急いで右足から取りかかる。

「これ位で折れるなんて小さいプライドだね」

「く…」

(これも小夜子を救う為だ。それになるべく時間をかければ)

「五分以内に両方やってね。五分たって終わらないようなら取りあえず踏みつけて勘弁してあげる」

「」

「五分たつても終わらないなんて」

Xは公平を嘲笑いながら踏みつける。

苦しい。

足がどけられるのにも五分かかった。

次は何だろうか。

「じゃあね……」

再び足が目の前に置かれた。

「僕の胸の位置まで登って、取りあえず胸の谷間位の所ね」

もう公平は何の文句も言わず、忠実に命令を実行する。

正直言つて恐いがどうしようもない。

何だか小夜子を守るとか考えていた気がするが忘れた。

何より優先すべきは自分の命だ。

膝まで登った辺りで死にそうになった。

つい、下を見てしまう。

体がすくんだ。

体が動かない。

「何休んでるの？落とされたいの？」

Xの声がする。

ここからでも落ちたらただでは済まない。

体が動くようになる。

有り得ないとは思っているが、落ちたくない。

まだ、死にたくない

上半身までたどり着いた。

目指すゴールはXの胸の谷間はもうすぐだ。

『随分と格好がつかないな』と自嘲する。

この辺りは下半身より少し柔らかく、登りづらい。

それでも少しずつ、ゴールに近づく。

「着いた…」

「わーおめでとう。けどそろそろ気絶してもらおうかな」

「どうやって?」

「こうやって」

そして、Xは公平を谷間から落とした。

「うわああ!」

いくら公平でも流石にこれは死ぬ。

Xの胸の位置と言えば高さ約80メートルだ。

だが床に届く前に別の地面、Xの膝が現れた。

それが、モロに当たり、体が元の位置まで浮いた。

とどめに両手で蚊を潰すように挟まれる。

公平はここで気絶した。

「少しやりすぎたかな。それにしても人間って凄いね。あれだけや
ってまだ生きてる」

言いながら、Xは小夜子の待つ部屋への扉を開けた。

目の前まで来て彼女が凄く震えているのを見てゾクゾクとした。

そういえば、女の子の小人を苛めるのは初めてだ。

自然と笑顔がこぼれる。

彼女は酷く絶望してるみたいだ。

もっと煽ってあげよう。

Xは公平の体を低い位置から投げ捨てた。

「ヒ…!」

小夜子は小さく叫んだ。

Xはそれを見てまたゾクゾクした。

彼はまだ、死んでない。

目が覚めたのも何人かいるし、大丈夫だろう

後は…

「さあ…後は君だけだよ。小夜子ちゃん？」

Xの手が彼女を優しく包む。

「嫌！放して！止めて！」

そこで少し強く握ってやる。

「ウグツ…」

もう、こうなれば、小夜子はただの玩具だ。

「ふふ…大丈夫だよ。優しくしてあげるから」

掴んだまま目の前に持ってきて、優しく言う。

手の中の小人は助けて、とか、止めてとか叫んでる。

聞こえない振りをすれば、彼女は、自分のあまりの小ささに絶望す

るのだろうか。

そついう実験もいいかもしれない。

別室への扉に手をかけて、彼女とどうやって遊ぼうかと考えた。

終わり

(後書き)

一応言っておくと公平も小夜子も死んでませんからね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8211z/>

絶望少女

2011年12月26日00時49分発行